

## 死者をいかに生かし続けるか

——オーギュスト・コントにおける死者崇拜の構造

伊達聖伸

——「死者は、私たちにおいて、私たちによって、愛し、さらには考えるのをやめない」

——「生者は、つねに、そしてますます、死者に支配される」（オーギュスト・コント）

### はじめに

実証哲学を構築したオーギュスト・コント（一七九八—一八五七）が、その後半生において「人類教」を創設したことはよく知られている。だがこれは、総じて言えば「失敗した新宗教」であった。現在の私たちの多くにとつて、この宗教はどこか嘲笑を誘うところがある。その教義や儀礼に、荒唐無稽と思われる部分が含まれていることは事実だ。この宗教の中身を丁寧に見直す動きがほとんど見られないのも無理はない。

だが、そこには、今日の私たちが参照し、考察を進めていくに足るだけの鋭い洞察や豊かな内容も備わって

いるのではないか。特に、死者崇拜が人類教の中核をなしていることの意義はもつと評価されてよい。コントは、神なき時代における生者と死者の関係を深く考えている。死者とは何か。いかにして生者は彼らのことを記憶してゆけるのか。そのためにはどんな社会生活の組織が必要なのか。

このようなテーマは、現在を生きる私たちの関心にもつながってくるはずだ。私たちは実際、神の死後と呼ばれる時代に生きていて、そのなかで死者のことを考える。その際、少なからぬ人たちが、死者を記憶する重要性を感じつつ、しばしばそれを忘れたかのような日常生活を送っている。社会生活のなかで死者とどのような関係を結べばよいのか、共通理解ができていたと言いたい。この種の兆候は、おそらくはすでにコント自身が感じていたことだろう。だからこそ、近現代社会における死者崇拜論の「古典」として、コントを積極的に読み直す価値がある<sup>1)</sup>。

以下ではまず、人類教が死者崇拜を中心に組み立てられていること、またこの宗教の核心が、死者を記憶し、生者のうちと生者のあいだに生かし続ける点にあることを確認する。次に、そのための手段として、コントが「もの」の力に注目していることを指摘する。他方、「永遠の喪」という考え方がかりに、コントの想定する生者と死者の関係が、従来の（または私たちの普段の）死生観と大きく異なっていることを示す。そのうえで、コントが組織化を企てた私的な公的な礼拝の具体的内容を分析する。これらの議論を通し、生者は歴史のなかで死者との関係において生きていくということが、はつきり見えてくるはずである。そこには、生者はいかに死者に向き合うべきかという道徳的な問いが含まれている。この問いは、ひとりコントのみならず、現代を生きる私たちにも等しく投げかけられていよう。

## 一 「人類」の中核をなす「死者」

コントが人類教を創設したことは、それまで彼が築き上げてきた実証哲学の体系を実践に移しはじめたことを意味する。もともと彼の実証主義には、社会の再組織化という野望があったから、この展開には必然的なところがあった。だが、クロティルド・ド・ヴォー（一八一五—一八四六）というひとりの女性との出会いがなかったら、今日私たちが知るような人類教の姿はありえなかつただろう。ここでは、個人的な出来事と社会的な使命——実証主義による社会秩序の構築——とが、分かちがたく結びついている。

したがって、コントの死者崇拜が、彼の個人的な実践であると同時に社会組織の提言であつたとしても不思議ではない。事実それは、薄命だつた愛する女性に捧げる日々の礼拝であると同時に、社会の再組織化を目的とする一大装置であつた。彼はあらゆる追悼の手段を用いて、クロティルドを生かし続けようとする一方、「人類」(Humanité)という新たな「偉大なる存在」(Grand Être)の概念を軸にして、死者たちに対する礼拝を組織しようとした。

では、「人類」もしくは「偉大なる存在」とは何か。コントの定義によれば、それは「すすんで宇宙の秩序を完成しよう」と協力する、過去、未来、そして現在の存在の総体である」(Comte, [1854]1929: 30)。これは一見、すべての人間を足したものと思われるかもしれないが、そうではない。というのも第一に、「人類」の呼称にもかかわらず、そこには動物も入りうるからだ。実際「ある種の人間より馬や犬や牛などの方が尊敬に値する」こともあるとされている(Comte, [1852]1966: 79)。これに関連して、第二に、宇宙の秩序の構築に協力するどころか、それを破壊する方向に歩みを進めた人間は「人類」の名に値しない。第三に、過去と現在と未来の關係に注意しておきたい。「人類」とは、今現在生きている人間の総和ではない。現存する人間は、祖

先と子孫のことを考えなければならぬ。ところで、未来の存在は、私たちが思いを馳せるべき存在ではあつても、それを具体的に思い描くことはできない。しかるに、過去の存在は具体的にあり、私たちがのあいだに具体的な関係を結ぶことができる。その死者が愛する者であればなおのこと、関係はいつそう親密になる。以上からおのずと導かれるのは、「人類」ないし「偉大なる存在」の中核をなすのは、愛の対象としての身近な「死者」であり、歴史上の偉大な「死者」たちだということである。「人類」は、本質的に死をまぬかれて生き延びるにふさわしい死者たちから構成されている」(Comte, [1852] 1966: 186)。

コントは、「人類」という新たな「偉大なる存在」を「神」に代わるものとして提示する。この置き換えの意味を見誤つてはならない。これは新たな絶対者の導入ではなく、神学的段階や形而上学的段階では抽象的だった存在を実証主義の地平で具体化することなのだ。一神教の神学は、神の偉大さを称えるが、みずから進んで死者崇拜に向かうようなものではない。そして、超自然を信じる態度では、死者の表象は神秘に包まれるよりほかなく、生者とのあいだに本質的な類似を見つけることができない (Comte, [1852] 1966: 159)。これに対し、人類教は、愛と尊敬の対象である死者に直接向き合うことを説く。人類教とは、神を退位させ、死者を崇拜する宗教なのである。<sup>2)</sup>

実証主義の特徴は、*« relatif »* という言葉によく表われている。今見たように、神を死者に代えて断絶を解消することは、「絶対的」(absolu)なものを「相対的」(relatif)にすることにわかっている。ところでここには、生者と死者が「関係的」(relatif)になるという含みもある。今度はこの面を強調したい。

「人類」ないし「偉大なる存在」は、私たち抜きで存在するものではなく、まさに私たちとの関係において存在する。実を言えば、この存在は私たちの投影にほかならない。ただしそれは、あるがままの私たちをそのまま投影したものではない。なぜなら、私たちと「偉大なる存在」の関係は、愛と尊敬を基礎とした礼拝にお

いて成り立つており、そこでは対象の理想化が起こるからだ。このようにして高められた存在は、ある意味では私たちが独立している（仮に私たちの一部が礼拝を怠ったとしても、また現在礼拝を行なっている生者が死んだとしても——礼拝を引き継ぐ者がいれば——存続するからである）。だがそれは、生者の礼拝がなければ存在しないという意味では、私たちに依存している。

ところで、礼拝において理想化されるのは、対象の方だけではない。実は礼拝を行なう私たちも高められている。理想化の作用は双方向的にはたらくのだ。確かに静態的にとらえると、「偉大なる存在」は私たちよりも高いところに位置しているように見えるが、この存在は私たちの手の届かないところにあるのではない。礼拝という動態的な場において、私たちはこの存在をうちに感じつつ、そこに参入し、みずから高められることができる。しかもこの関係は発展的で、自分自身が向上すればするほど、崇拜の対象も発展する。このように「礼拝 (culte) とは本質的に心の涵養 (culture) であり、それを通じて「人類」は豊かに耕される (Clauzade, 2003)。

このような双方向的な理想化作用の中心に位置するのが「死」である。生者はあくまで礼拝の実践者であって、生前から礼拝の対象にはならない。人間には生きているうちは決定されないのであるが、死して定まるところがある (Comte, [1852] 1966: 15)。死を通過し、物質的・生物学的な拘束をまぬかれ、道徳的・社会的な人間の秩序に組み入れられることにより、人の本性は純化される。一方、生者には、死者の欠点を忘れ、その長所しか思い出さなくなる傾向がある (Ibid.: 163)。こうして理想化された死者は、礼拝を通し、生者のなかに「第二の生」 (Comte, [1852] 1929: 60) を見つけて永続する。そして、まさにそのことにより、生者の実在的な生を律し理想的な方向に高めていく。

このように相互に理想化しあう礼拝を成立させるためには、生者は愛する死者を脳裏に鮮明によみがえらせ、

尊敬すべき死者のことを生き生きと心に思い描く必要がある。ところが、人間の知性の法則にしたがえば、死者のイメージは放つておけば薄れていく一方である。それに対抗するには、「もの」の喚起力に頼り、それを用いた礼拝を意識的に組織することが必要である。

## 二 ネオ・フェティシズムと「もの」の力

コントによれば、死者のことをありありと心に思い浮かべるには、思い出の品をもとに、思い出を豊かにするという手段が効果的である。彼がフェティシズムを積極的に説く理由はここにある。

コントはフェティシズムをかなり早い段階から論じている。前期コントは、それを人間の知的活動の最初の契機として評価し、神学的精神の根本原理と理解する。これに対し、後期コントは、フェティシズムと神学的精神を峻別する。神学主義は人間とものの関係の奥に神という実体を立てるが、フェティシズムは間接崇拜ではなく直接崇拜なのである（杉本、二〇〇三）。

フェティシズムは、すでに前期コントにおいても、キリスト教や近代形而上学を批判する梃子として用いられていた。感情を重視する後期コントは、これを再び取り上げ、ネオ・フェティシズムとして鑄直していく。

今日「フェティシズム」と言えば、小さな部分にこだわる特殊な性愛とか、一種の性的倒錯とか、精神分析や臨床医学の分野で用いられる用語の意味合いが強い。だが、フェティシズムという言葉は、もともと『物神崇拜』（二七六〇年）を著わしたシャルル・ド・ブロスに由来し、ここでは「もの」を崇める宗教のことを指していた。この言葉を用いてマルクスは、使用価値から交換価値への転換を「商品の物神化」と呼んだ。そしてフロイトは、マルクスが経済の分野で論じたことを性愛の分野に応用した。すなわち、フェティシズムは、

性にかかわる対象から隠れた価値を引き出すことによつてそれを過大に評価することを意味するようになった。そしてこの用法が一般化したのである (Assoun, 1994)。

コントのネオ・フェティシズムは、フロイト流のフェティシズムとは異なっている。なるほど、クロティルドの毛髪を後生大事に持ち、それを眺め返しながら日々の礼拝を行なうコントの姿は、フロイト的な意味でもフェティッシュかもしれない。だが、コントのフェティシズム論は、そのような意味には限定されない。

コントはむしろド・ブロスに忠実な形で、「もの」を直接的に崇める宗教を唱えている。これは偶像崇拜ではないことに注意したい。偶像とは、本来具象化できないはずの超越的なものを物質に投影したものであるのに対し、コントのネオ・フェティシズムは、具体的な「もの」によつて、現存した者のイメージを再び強化しようとするものだからだ。死者にまつわる「もの」が死者の記憶を呼び覚まし、死者が生者において再び生きるようになり、生者が道徳的な生き方をするようになる。

### 三 永遠の喪

死者が死後も生きるためには生者が必要とするように、生者もよりよく生きていくうえで死者との関係を維持することが欠かせない。コントは、あの世とこの世をきっぱり分けるのではなく、死者と生者のつながりに注目する。それは、彼の喪についての考え方を特別なものにしてている。

普通私たちは、一定期間喪に服した後で、喪が明けるといふ発想の方に慣れている。ファン・ヘネップやエルツに代表される人類学的な解釈では、服喪は別離から再統合への移行期と見なされ、喪の儀礼や習俗は、生者が死者との分離を受け入れていく過程として位置づけられる (内堀・山下、二一九八六、二〇〇六・九八―

九九)。また、フロイトによれば、「喪の仕事」の目指すところは、死別の悲嘆から「正常」な状態に回復することである(フロイト、一九七〇)。ところで、これらの作業は、あの世とこの世は隔てられているという認識に支えられている。この場合、残された生者たちは、死者がこの世からあの世へ移るのを見守った後で、この世の活動を再開する。

これに対し、コントは死者をあの世に送り届けるのでも、悲嘆からの回復を目指すのでもなく、生者のなかに、生者のあいだに死者を生かし続けることを説く。死者が死なないためには、そうするしかない。だから、コントには喪明けという概念がない。愛する者を失った者が営むべきなのは「永遠のやもめ暮らし」(veuvage éternel) である (Comte, [1854] 1929: 127)。

ラケル・カプロは、喪明けのあるなしの観点から、コントが死者に対して行なう儀式が「供儀」(sacrifice)ではなく、「追悼」(commémoration)の秩序に属すると指摘している (Caputo, 2001: 115-118)。ここまでは述べてきたコントの喪の儀礼の特質を、今度はこれらの二つの儀礼を比較対照することによって、もう一度明らかにしてみよう。

供儀の解釈にはさまざまなものがあるが、あの世との交信を通じて、供物と同一視された供儀者の状態を變える儀礼というユベールとモースの見方が代表的なものであろう。供儀のパラダイムは、あの世とこの世の隔たり、聖と俗の断絶を前提としている。たとえ両者のあいだにコミュニケーションが打ち立てられるとしても、それは儀礼のあいだの一次的なもので、しかもその儀礼は、生者と死者の関係について言うならば、死者を死者の世界に送り出し、生者が生者の世界で平衡を回復することにかかわっている。二つの世界は分け隔てられており、あちらの世界に死者を位置づけることができたときに喪が明ける。

これに対し、追悼の儀礼は、コントに即して述べるならば、死者を生者のうちに、生者のあいだに生かすも

のであり、それと同時に、生者は自分が死者の影響の下に生きていることを自覚するようになる。死者と生者は、越えることのできない別々の世界に住んでいるのではなく、文字通り共存している。しかもその関係は発展的だ。すなわち、礼拝の反復により、死者のイメージがいつそう鮮明になり、その特長がますます明らかにされるとともに、生者が自分自身の特質を認め、それを掘り下げていくようになる。死者と生者の関係は深まるのであり、そのかぎりにおいて相手も自分も変容しうる。喪明けを想定するパラダイムでは、死者と生者の関係は疎遠になりがちで、生者が死者を忘却してしまうおそれもあるが、追悼のパラダイムはそれに抗つて死者崇拝を組織する。喪は永遠に続くのである。

次の議論に移る前に、ここには、死別の悲嘆をめぐる現代的な考え方に通じる議論が含まれていることに注意を促しておきたい。従来は、死者を弔ったのち生者は以前の生活に戻るべきだという考えが支配的だったとすると、近年ではこの考えが見直されており、「死後も続くはずな」(Klass, Silverman and Nickman eds., 1996) といつて、残された生者の生活のうちに死者のためにふさわしい場所を見出していくことの重要性が説かれている(戸澤井、二〇〇五：一四三―一四七)。ところで、これはすでにコントが訴えていたことではなかったか。ここにはコントの現代性の一端が窺えよう。

#### 四 私的な礼拝、公的な礼拝

死者を生かし続けるには、「もの」を中心とする「環境」を整備する必要がある。それは、具体的には、私的ならびに公的な生活において、日々の礼拝の実践を組織することを意味する。

以下では、人類教における私的な礼拝 (culte privé)、公的な礼拝 (culte public) の骨格を提示する。あらか

じめ注意しておきたいのは、コント自身、私的な礼拝と公的な礼拝を順々に説明しているが、それは公私の峻別を意味するものではないということである。のちに述べるように、コントは、私的な生活がうまく公的な生活に接続するよう工夫を凝らしている。

さて、私的な礼拝ないし個人的な礼拝は、身近な愛する死者に対して捧げられるもので、親密さを特徴とする。コントは、各家庭に祭壇ないし小さな礼拝室を設け、そこに死者の思い出の品々や遺影を安置するよう勧めている。そして、朝起きたとき、夜寝る前、仕事の合間の一日三回、礼拝を捧げるよう説いている。<sup>4</sup>

特に朝の礼拝が重要だとされている。コントは、祭壇の前で愛する死者のことを思うことから一日をはじめよう説く。そこで執り行なうべき儀式の手順や内容については、事細かな指示を与えていない。つまり、礼拝の形式はさまざまであつてよいのだが、毎日行なうことが大切である。それが十分に発達した暁には、およそ一時間ほどの長さになるだろう。就寝前の礼拝は、ベッドで行なわれる。無事に一日を過ごせたことを感謝し、静かに頭を休めて寝入るようにする。長さは、朝の礼拝の半分くらいだろう。仕事の合間に行なう礼拝は、さらにその半分くらいの長さとなる。その内容やタイミングは、従事する仕事によつて異なつてくるだろう。ただ、これを行なうことが重要なのは、意識しなければ忘れがちな愛の感情を仕事にも吹き込んでいく必要があるからだ (Comte, [1852] 1966: 175-176)。

日々の私的な礼拝においては、死者との親密な関係が思い出され、次第に死者が生者のうちに生きていることがはつきりしてくる。そして、敬愛や共感の感情が反復のうちに育つてゆく。これは、私的な礼拝の枠組みのなかだけで完結するのではなく、公的な礼拝を行なう準備にもなっている。

公的な礼拝は、人類という偉大なる存在の中核を形作る死者への追悼によつて構成されている。そこにおいて、「現在は過去をたたえ、よりよく未来に備える」 (Comte, [1852] 1966: 185)。ジュリエット・グランジュの

言葉を借りれば、これは私たちの涵養 (culture) を目的とした、「歴史の宗教」 (religion de l'histoire) あるいは「記憶と文化の宗教」 (religion de la mémoire et de la culture) である (Grange, 1996: 401, 403)。

公的な礼拝の組織化が意味するのは、人類教による社会生活の再構築にほかならない。コントは、人類の歴史を築いてきた偉大な死者たちに思いを馳せることができるよう、彼らを日常的な社会生活のなかに再配置することを試みる。街の通りに彼らの名前をつけたり、銅像や記念碑を建てたりすることを提案する一方、コンサートや演劇などの祝祭的行事を通して広い意味での公教育を企てている。けれども、おそらく最も有名で最も象徴的なのは、グレゴリオ暦に代わる実証主義暦を編み出したことだろう。

この新たな暦は、七日×四週＝二十八日をもつて一ヶ月とし、これに即して一年を一二三の月に分けるもので(三六五÷二八＝一三あまり一)、残りの一日はすべての死者に捧げられる。それぞれの月、週、日は、人類の発展に貢献した過去の偉人たちの名をもっている。例えば一月はモーセの月と名づけられ、神権政治の時代の偉人に捧げられている。「人類曜日」 (Humandj) と呼ばれる日曜日には、ブッダや孔子、マホメットの名が見える。二月、三月、四月はそれぞれ、ホメロス (古代詩)、アリストテレス (古代哲学)、アルキメデス (古代科学) の月で、ヘシオドスやヴェルギリウスから、タレス、ピタゴラス、ソクラテス、プラトン、そしてヒポクラテスやユークリッドらの名前が見出せる。五月、六月、七月は、それぞれシーザー (軍事文明)、聖パウロ (カトリック)、シャルルマーニュ (封建文明) に捧げられている。八月から一三月で近世・近代をカバーしており、それぞれ、ダンテ (叙事詩)、グーテンベルク (産業)、シエークスピア (近代演劇)、デカルト (近代哲学)、フリードリヒ大王 (近代政治)、ビシャ (近代科学) の月である (Comte, [1849] 1993)。

この偉人目録さながらの暦をもっと細かく検討していけば、コントがどんな人物にいかなる評価を与えているかが見えてくるので興味深い。だが、ここでは深く立ち入らず、さしあたり次の二点を指摘しておきたい。

第一に、コントはこの暦を導入することで、日常的な社会生活そのものを公的礼拝に一致させようとしているのだということ。人類教は市民生活と別のところで営まれるのではなく、市民生活そのものを律することを目指している。私たちは、常日頃から死者との関係のなかでみずからの精神を磨く生活を送るべきだということである。第二に、実証主義暦は、一年をかけて人類の歴史を辿り直し、それを毎年反復するよう組まれているという事。この暦にしたがつて年を重ねていけばいくほど、偉大な死者たちはますます私たちに馴染み、彼らへの尊敬もいや増すはずだ。一年の最後の日が、すべての死者への追悼によって締めくくられていることの意味の大きさも忘れてはならない。私たちは死者たちが築き上げてきた過去にいかにも多くのものを負っているかをよりよく自覚し、過去の膨大な蓄積の上に現在の自分たちの生活を位置づけることができるようになるであらう。

先に示唆しておいたように、コントは私的な礼拝と公的な礼拝を截然と分かつのではなく、両者を有機的に連関させている。このとき、二つの礼拝を具体的につなぐのが、人類教の司祭が執り行なう九つの社会的秘跡 (sacraments sociaux) である。これは、私的な生活を公的な場で承認し、公的な生活に組み込むことにかかわる一連の儀礼である (Caputo, 2001: 100)。軸となるのは家庭であつて、現にこれは個人に対しては社会的なものとして現われ、公的な生活に照らすと私的なものとして映る。九つの秘跡は、この世に生を享けてから死後「偉大なる存在」に組み込まれるまで、人生におけるさまざまなライフステージに応じて行なわれる。ここでは、その内容を逐一説明する労を省き、死者崇拜に直接関係する八番目と九番目の秘跡、すなわち「変貌」(transformation) と「包摂」(incorporation) の秘跡について説明する。

まずは「変貌」の秘跡から。コントは、私たちが普通「死」と呼ぶ現象を、肉体的な生から精神的な生への移行ととらえている。だからそれは、生の「終わり」ではなく別の生のあり方への「変貌」である。変貌の

秘跡は、明らかにカトリックにおける終油の秘跡（ないし臨終の秘跡）に対応しているが、コントは質的な違いを強調する。コントによれば、カトリックは空想の産物としての永遠を仰々しく持ち出し、死者と生者のあいだに自然に成り立つはずの感情のきずなを断ち切ってしまった。これに対し、人類教の司祭は、死者の存在をいわば「開いた」状態にしておくので、遺族と死者の交流は愛情によって深められる（Comte, [1854] 1929: 129）。

「包摂」の秘跡とは、肉体の死から七年が経過し、精神的に純化された存在が「偉大なる存在」に組み込まれるのがふさわしいと判断されたときに執り行なわれる儀式である。そこで「氣高き亡骸」は「人類教の寺院を取り囲む聖なる森に恭しく移される」（Comte, [1854] 1929: 130）。これによって死者は、遺族の個人的な礼拝の対象にとどまらず、社会的な礼拝の対象にもなり、生者が礼拝を続けるかぎり「永遠の生」を享受する。

これまで説明してきたものなかには、今日の私たちの目には突飛に映る内容もあるだろう。コントの構想はいかにも想像力たくましく空想的だと皮肉る向きもあるかもしれない。ただ、念のため注意を促しておきたいのは、コントはこれらの礼拝をまったくの無から考案したのではなく、モデルとなるものは手元にあつたということである。人類教における九つの社会的秘跡がカトリックの秘跡を下敷きしていることは明らかだし、実証主義暦による偉人崇拜の原型はカトリックの暦における守護聖人の祭に見られる。グレゴリオ暦に代えて新たな暦を導入する動きは革命期にもあつたし、同じ時期に祖国の偉人をたたえるために創設されたパリのパンテオンが人類教の寺院のモデルであつた。<sup>10</sup>

ともあれ、この節で述べてきた二つのこと、すなわち、コントが死者の見方についてカトリックからの切断をはかったこと、私的な礼拝と公的な礼拝の関係について、もう一度別の観点からまとめ直して次に進もう。確かにキリスト教においても、死者が再び生きるといふことは起こりえる。だがこの「復活」は「奇跡」で

あつて、超自然的な神への信仰がなければ起こりえない。これに対し、人類教では、死者は生者の思い出において、そして歴史に組み入れられることによつて、「第二の生」を生きる。この場合、思い出は私的な礼拝に、歴史は公的な礼拝に結びつけられる。私的ならびに公的な礼拝を通して、愛する者、尊敬すべき者のイメージはますます鮮明に脳裏によみがえるものとなり、ますます力を持つようになる。それは同時に礼拝を行なう生者の心を育てていく。死者が死後も生きるかどうか、それはひとえに死者の美德と生者の意志にかかっている。

## 五 死者の他者性と記憶の政治学

よく、人間は必ず死ぬ、しかしいったん死んだらそれ以上は死なない、という物言いがなされる。なるほど、これは肉体的な死についての話であり、そのかぎりでは事実を突いてはいる。だが、コントはこれとは違つた見方をする。先に述べたように、私たちが普段「死」としてとらえる現象は、物質的な生から精神的な生への「変貌」だからだ。死者は生者の記憶に生きている。だから、死んでいない。だがもし、生者に忘れ去られてしまつたら、そのとき死者は死ぬ。「記憶」こそが、実証主義の「終末論」を特徴づけている (Grange, 2002: 14)。

けれども、ここで次のような疑問が湧くかもしれない。確かに、死者は生者の記憶によつて生き続けるかもしれない。だがそれは、あくまで生者の表象する死者であつて、やはり死者その人が生きているとは言えない。生者に同化されうる部分のみが生者の側から一方的に回収されるのであつて、死者の他者性は抜け落ちていくのではないか。死者は生者に都合よく解釈され、捻じ曲げられているのではないだろうか、と。

なるほど、このような疑問が出るのはもつともであり、ここで危惧されている問題が現実のものになるおそ

れもなくはない。だが、コントの死者崇拜の基盤にあるのが愛と尊敬だということを忘れてはならない。もしこの原則が守られるならば、生者が勝手気ままに死者の像を歪めてよいということにはならないはずである。また、死者と生者の関係が固定的なものではなく、発展的なものだということも考慮すべきだ。死者は、ある時点で生者にすっかり回収されてしまう存在ではない。事態はまったく逆であつて、死者は生者のなかで生き生きとした存在になればなるほど、ますます生者が汲み尽くすことのできない存在となる。換言すれば、死者は生者が完全に我有化することのできない他者であり、しかも死者の残余は成長する。

〔死者とのあいだに愛情を基盤とした交流が成り立つや〕死者のそれぞれの生は、私たちの生と深く混ざることになるが、それによつて死者の道徳的ならびに精神的な独自性が変質してしまうことはまったくない。とりわけ、死者の個性が真に傑出したものであるときには。私たちと死者との親密な交流が発展すればするほど、互いの根本的な違いがますますはつきりするとさえ言える。(Comte, [1852]1966: 163)

したがつて、死者と生者が深く交流するとき、それは死者が生者に回収されることを意味するのではなく、まさに両者のあいだに成り立つ共鳴を手がかりとして、死者と生者のそれぞれの特徴が明らかになつていくのである。だからコントが、「死者は、私たちにおいて、私たちによつて、愛し続け、さらには考えることをやめない」(Comte, [1852]1966: 163)と言つとき、生者が死者を生かしているメカニズムだけを見てはならない。文字通り、死者が生者を律しながら成長を続けることが強調されているのだから。

コントは、こうも言つている。「生者は、つねに、そしてますます、死者に支配される」。この言葉は、個人の礼拝にも社会生活にも当てはまる。物理的に考えれば、一般に年齢を重ねれば重ねるほど身近な死者は増え

ていくし、歴史が進めば進むほど死者の数は累積していく。より精神的な観点から言えば、私的な面では、時間とともに生者の美德は身近な死者によつて磨かれていく。また公的な面では、歴史が進むにつれ過去はますます膨らんでいく。現在を生きる生者は、歴史の流れのなかにあつて、たえず肥大化していく過去を引き受けながら、「偉大なる存在」をよりよく構築するよう努めなければならない。

ポール・リクールは、歴史のなかの生者を「負債のある存在」(être-à-dette)だと言っている。歴史のなかの生者は、もはや現前してはいない過去を、現在という時において代理表象する存在なのだ (Ricoeur, 2000: 474 = 2005: 122)。リクルールの念頭におそらくコントの名は浮かんでいないが——むしろこのことはコントの忘却を示している興味深い——この言葉は、まさしくコントの言わんとするところを正確に言い当てている。コントにしたがえば、歴史の重みを自覚すればするほど、現在のみを特権化するわけにはいかなくなる。なるほど、過去を表象するのは現在の生者だ。けれども、そのことは、生者が過去を手前勝手に代理表象する権利を持つていることを意味するのではない。現在の生者は過去の歴史に規定されているのであり、そのことを自覚し、死者に照らしてみずからを律するべきである。

現在を生きる生者は、公的な礼拝を通して過去をたたえる。そして、そのことによつて未来をよりよくしようとする。このとき「公」は、「私」(private)との空間的対比によつてのみとらえられるのではなく、歴史的な時間との関係においてもとらえられている。すなわち、コントにおいて、「公」(public)という言葉は、「現在」(present)を生きている人間の全体を指すものでもあつて、それは私たちに「先行」(priority)する過去と「後続」(posteriority)する未来とはさまれている (cf. Brausein, 2003: 62)。これは、コントの「公」概念の大変ユニークな点であろう。「公」は「現在」に結びつけられ、その価値や正当性は「過去」と「未来」にかけてはかられる。

このような観点から相対化された現在は、過去の記憶を引き受けよりよい未来を築く鍵を握っているという意味では限りなく重要だが、過去と未来のあいだにはさまれたひとつの点にすぎないという意味では非常につましやかなものである。現にコントは、公的な礼拝において、「現在は〔過去と未来という〕二つの無限の広がり」のあいだにあつて、すすんでみずからを自制する」と述べ、こう続けている。

〔公的な礼拝における〕深い感動は、私たちを傲慢にするところか、たえず私たちのうちに誠実な謙遜の心を育てる傾向がある。というのも、いくら私たちが力をあわせて頑張つても、「偉大なる存在」から受け取つたものに比べれば、ごくわずかなものしか与え返すことができないと、深く感じるからである。  
(Comte, [1852] 1966 : 185)

このように、膨大な過去の蓄積の上に現在がなしうることは、ごくわずかなのだ。重要なのは、そのことを意識して、過去とのつながりを強化していくことである。しかるにコントの目的には、同時代の風潮は、過去を軽視し、無視するものと映つた。本来ならば、生者は死者に支配されていることを自覚して、死者を生かしていかなければならないのに、死者に対してたえず反抗を挑んでいる。コントはこうした傾向を「西欧の病」(maladie occidentale)と呼んでいる (Comte, [1855] 1990 : 5 = Lettre à Audiffren)。

したがつて、コントが公的な礼拝を組織し、「過去をたたえ、よりよく未来に備える」よう呼びかけたのは、このような「病」への処方箋でもあるのだ。彼は、現在を特権化して過去を矮小化するような態度に抗し、しかるべき歴史意識に照らして現在をとらえ返そうとすることを唱えている。

このようなコントの企ては、あるべき記憶のポリティクスの構築にかかわっていたと考えられる。人類教の

公的礼拝は、記憶されるべき死者たちを日常的な社会空間に再配置するもので、それは規範的で政治的な実践の射程を持つていたからである。現在が過去に規定されていることを自覚し、死者たちを愛と尊敬において生かすことができはじめ、生者は過去の死者の記憶の担い手となりえる。ただ、この原則はともかく、運用上の構成に問題がなかったかどうか。それを最後に検討したい。

## おわりに

以上、コントにおける死者崇拜の内容と基本的構造について述べてきた。それは、「歴史」がクローズ・アップされ現世と来世の関係が変わった一九世紀の時代状況を色濃く反映していると同時に、現代を生きる私たちにもいろいろと示唆を与えるものであるだろう。だが、現代的なテーマから出発してコントを読み直した場合には、彼の認識の地平が古臭く思えたり、議論の詰めが甘いと感ぜられたりして、戸惑いを覚えることも少なからずあるだろう。

そうした問題として、まず、人類教が女性に割り当てている位置が今日の感覚にそぐわないという点を挙げておく。公的な礼拝の対象となる「人類」に組み込まれるのは、公的な生活において活躍した人間だが、女性にはなかなかそのような機会が与えられない。コントの考えでは、女性は基本的に家庭にあつて男性によい影響を与える存在である。そしてその男性が「人類」に包摂されたとき、彼を支えた女性という資格で「付随的に」包摂される。このような見方は、今日では受け入れがたいだろう。ただ、このような男女観は当時としては普通であつたことを言い添えておく。また、実証主義層には何人かの女性たちの名前も見えることを指摘しておく（ジャンヌ・ダルク、カステリア女王イザベル、ラファイエット夫人、スタール夫人など）。

次に、今日の目から見ても気にかかるとは、コントがいかなる資格において、記憶されるべき死者とそうでない死者を選別しているのかということである。<sup>11</sup>なるほど、過去の偉大な死者たちを記憶していくべきだという主張はもつともで、この主張に賛同することのできる者はきつと少なくないだろう。だが、とりわけ誰が記憶されるべきかをめぐって社会的な合意を形成することは、非常に困難であることは明らかだ。人類教をこれから組織する立場にあつたコントは、この課題を素通りしているところがある。そして、みずから代理表象を行なつてしまつている。したがつて、人類教の公的礼拝の組織化は、あくまでコント自身による記憶のポリテクスの構築であつて、それは記憶をめぐる実際上の政治的な争いを経て承認されたものとはいえない。それゆえ、記憶されるべき死者とそうでない死者の選別は、コントの主観に委ねられているという感が否めない。

コントが私的な礼拝と公的な礼拝のあいだに齟齬を認めていない点も、今日の視点からすると不十分であるように見える。私たちは、両者が食い違うケースがあることも知っているからだ（日本の文脈から一例を挙げれば、自衛官合祀拒否訴訟のようなものがある）。だが、コントが公私の分割に否定的だったのは、私的な礼拝と公的な礼拝とのあいだに齟齬が生じることを想定していなかったからというより、齟齬が解消されている状態を望ましいと見ていたことによる。

総じて言うなら、コントは死者崇拜を愛と尊敬に基づいて組織しているため、生者の善意に期待するところが大い。ところが、制度化というのはさまざま逆説をとまなつている。「すべては神秘にはじまり政治に終わる」というシャルル・ペギーの有名な言葉があるが、制度には本来の意図を捻じ曲げてしまうところがある。<sup>12</sup>それでもコントが制度化にこだわるのは、制度なしに生者が死者を想起し、生かし続けていくことはやはり困難だからだ。死者への愛と尊敬を維持し育むためには、それにふさわしい環境を組織する必要がある。も

しその過程で、死者への愛と尊敬が見えにくくなることがあれば、それは制度化の逆説について認識が甘かったというより、もう一度死者への愛と尊敬に立ち返るべきことを指し示しているのではないだろうか。

このような批判力を有している点において、コントは古びていない。彼の議論には、死者を生かすのは生者だが、生者が死者を捻じ曲げてしまつては、死者は生きてこないという論点が含まれているからだ。生者には、死者を代理表象する権利がある以上に、死者をきちんと生かすべくみずからを省みて律する必要がある。これは、生者と死者の関係をめぐる現代の諸問題を即決するような具体的な処方箋ではないにしても、これに沿つて議論を進めていくべき一般的な規準となつてよいものだと思う。

#### ■ 主要参考文献

- Philippe Ariès, 1977, *L'homme devant la mort*, 2 vols., Paris, Seuil. (＝フィリップ・アリエス、一九九〇、『死を前にした人間』成瀬駒男訳、みすず書房)
- Paul-Laurent Assoun, 1994, *Le fétichisme*, Paris, PUF.
- Jean-François Braustein, 2003, « La religion des morts-vivants : Le culte des morts chez Auguste Comte », *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, t. 87, pp.59-73.
- Raquel Capurro, 2001, *Le positivisme est un culte des morts : Auguste Comte*, Paris, EPEL.
- Laurent Clauzade, 2003, « Le « culte » et la « culture » chez Auguste Comte : La destination morale de la religion positiviste », *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, t. 87, pp.39-58.
- Auguste Comte, [1851, 1852, 1853, 1854] 1929, *Système de politique positive ou traité de sociologie instituant la religion de l'Humanité*, 4 vols., Paris, Société positiviste.

- Auguste Comte, [1848] 1993, *Calendrier positiviste, ou système général de commémoration publique*, Fontfroide, Para Morgana.
- Auguste Comte, [1852] 1966, *Catechisme positiviste*, Paris, Garnier-Flammarion.
- Auguste Comte, [1855-1857] 1990, *Correspondance générale et confessions*, t. VIII, Paris, Archives positivistes.
- ジークムント・フロイト 一九七〇「悲哀とメラノコリー」『フロイト著作集六』井村恒郎訳、人文書院、(原一九一七年)
- Juliette Grange, 1996, *La philosophie d'Auguste Comte*, Paris, PUF.
- Juliette Grange, 2002, *Le vocabulaire de Comte*, Paris, Ellipses.
- Dennis Klass, Phyllis R. Silverman and Steven L. Nickman eds., 1996, *Continuing Bonds : New Understandings of Grief*, Washington, D.C., Taylor & Francis.
- Annie Peit, 1998, « Du catholicisme au positivisme », in Michel Meyer (éd.), *Auguste Comte 1789-1998, Revue internationale de philosophie*, vol. 52, n°123, pp.127-135.
- Paul Ricœur, 2000, *La mémoire, l'histoire, l'oubli*, Paris, Seuil. (＝ポール・リクール、二〇〇四・二〇〇五、『記憶・歴史・忘却』上・下、久米博訳、新曜社)
- 佐藤啓介、二〇〇六、「汝、死者を忘るるなかれ——死者の記憶の場と宗教哲学」『人文知の新たな総合に向けて』第四回報告書、一六三—一八四頁
- 澤井敦、二〇〇五、『死と死別の社会学——社会学理論からの接近』青弓社
- 末木文美士、二〇〇七、『他者／死者／私——哲学と宗教のレッスン』岩波書店
- 杉本隆司、二〇〇三、『オーギュスト・コントの歴史哲学と社会組織の思想——フェティシズム論からの解説』『橋論叢』一三〇—二、三五—五五頁
- 内堀基光・山下晋司、「一九八六」二〇〇六、『死の人類学』講談社学術文庫

## ■註

1 このように述べる背景には、現代フランスにおいて、死の問題を正面から扱った哲学者としてコントが忘却に付され、もっぱらレヴィナス、ブランショ、デリダ、ナンシーなどが注目を集めている事情がある。これが示唆しているのは、死の哲学の最前線は、ハイデガー経由で形成されているということだ。もとよりハイデガーの問いは豊かなもので、その問いが深められることの意義は大きい。けれども、ハイデガーは死を「私の死」として語るあまり、「死者」を「他者」と見る視点が弱い。末木文美士は、このような観点から、「死」の哲学に「死者」が不在である傾向を指摘しつつ、その例外としてレヴィナスに言及し、田辺元を論じている（末木、二〇〇七）。だが、本稿で述べるように、死者の他者性はすでにコントに見出される。「死」や「死者」の問題にかんしてコントを「再発見」することは、ハイデガー以前に遡ることによってハイデガーの問いを相対化し、「死」や「死者」をめぐる現在の哲学的地図を書き換えることにも役立つと思われる。

2 フィリップ・アリエスが明らかにしたように、神の後退と死者崇拜の躍進は相関的である。フランスでは、死者崇拜は、一九世紀の心性の変化にもなつて定着した。もつとも、今度はカトリック側が死者崇拜を取り入れ、あたかも昔から実践してきたかのように振舞う事態が起こってくる（Arès, 1977: II 250-256 = 1990: 483-489）。

3 ここからは、死別による再婚は認められないという考えが出てくる。これは、一部の弟子の反対と離反も招いている。またコントは、自分自身が死の床に着くまで、毎週欠かさずクロティルドの墓を訪れていた。この墓地参詣もまた、親密な「汝の死」（アリエス）という一九世紀的な死のイメージに合致する。

5 曆に登場する人物のあいだにも月々週週の種類のエピラルキーが形成されているし、有名なのにまつたく言及されない人物もいる。例えば、シーザーやシャルルマーニュは文明の担い手として評価されているが、ナポレオンの名は挙がっていない。また、ホップス、ヒューム、ロック、デイドロ、モンテスキューらのために設けられた日はあるが、ルソーは無視されている。これはコントが、ナポレオンやルソーのことを同時代の社会秩序を混乱に陥れた張本人だと考えていることの表われである。ほかに、ブッダ、孔子、マホメットに捧げられた日があるのに、曆のなかにイエスの名がまつたく見られないことも注目に値する。

- 6 九つの秘跡は以下の通り (Come [1854] 1929: 123-131)。一、「提示」(presentation) 〓誕生時、二、「入門」(initiation) 〓公的生活への加入、三、「許可」(admission) 〓恩恵を受ける一方だった「偉大なる存在」に対して奉仕を開始、四、「使命」(destination) 〓天職の自覚、五、「婚姻」(marriage) 〓六、「成熟」(maturité) 〓人格的にも社会的にも認められる一方、以後に犯した過ちを償うことは困難になる、七、「引退」(retraite) 〓八、「変貌」(transformation) 〓九、「包摂」(incorporation) 〓「入門」は一四歳、「許可」は二一歳、「使命」は二八歳、「婚姻」は二八歳から三五歳(女性は二一歳から二八歳)が目安、「成熟」は四二歳、「引退」は六三歳と、七の倍数を中心にライフステージが構築されている。それから、コントは女性の位置は社会ではなく家庭にあると考えているため——これは当時の意見としては一般的である——、「使命」「成熟」「引退」の三つの秘跡は女性には行なわれない。ちなみに、カトリックには七つの秘跡——「洗礼」(baptême) 〓「堅信」(confirmation) 〓「聖体」(eucharistie) 〓「告解」(pénitence) 〓「婚姻」(mariage) 〓「叙階」(ordre) 〓「終油」(extrême-onction) ——がある。
- 7 聖なる墓には、名前が刻まれたり、胸像や銅像が並べられたりするが、これは位階に応じて異なってくる。これに対し、「包摂」の対象外となった死者は、人類教の寺院ではなく、市町村の墓にとどめおかれる。完全に烙印を押された死者の場合は、死刑に処された者、自殺者、決闘で死んだ者などが眠る砂漠に移される (Come [1854] 1929: 130)。
- 8 コントは多くの点で、カトリックからの切断を図りつつ、そのモデルを引き継いでいる。コントとカトリックの両義的な関係については、Petit (1998) を参照。
- 9 コントは一七八九年を実証主義暦の第一年としている。
- 10 コントは、パンテオンを人類教の寺院に転用すべく自分に譲り渡すよう要求したり、建物正面のペディメントに刻まれた文言「偉人に対し祖国は敬意を払う」(Aux grands hommes la patrie reconnaissante) について、「祖国」を「人類」に置き換えるよう提案している (Aux grands hommes l'Humanité reconnaissante)。
- 11 いかなる基準かは、コントの目から見て「人類」の発展に寄与したか否かということだから、比較的是っきりしている。
- 12 佐藤啓介 (二〇〇六) は、死者の記憶に忠実であることと、死者の記憶を代理表象することはしばしば相容れないと

の認識から、代理表象なき記憶のあり方を探っている。

■付記

本稿は、平成二〇年度科学研究費補助金（日本学術振興会特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（だて・きよのぶ 日本学術振興会特別研究員（PD））

## Pour que les morts survivent : le culte des morts selon Auguste Comte

Kiyonobu Date

Notre sensibilité scientifique a eu longtemps tendance à ne pas prendre au sérieux les derniers textes d'Auguste Comte liés à sa religion de l'Humanité. Mais ceux-ci contiennent des éléments et des analyses très riches qui méritent leur relecture et leur réévaluation.

En situant le culte des morts au cœur même de sa nouvelle religion, Comte envisage les rapports entre les vivants et les morts à l'horizon exclusivement humain, c'est-à-dire, sans même supposer la notion de Dieu. Que sont les morts dans le monde sorti de la religion? Comment les vivants peuvent-ils les commémorer? Quelles organisations sociales sont-elles nécessaires dans ce but? Notre positiviste du XIX<sup>e</sup> siècle aborde de front ces questions essentielles qui intéressent aussi celles et ceux qui vivent aujourd'hui.

Comte considère que les morts constituent une pièce maîtresse dans l'échiquier de l'Humanité. Et les vivants sont censés les faire revivre à travers les cultes publics et privés qui constituent notre vie quotidienne. Ces cultes vont cultiver favorablement les sentiments des vivants qui seront ainsi transcendés grâce à l'amour. Notre auteur insiste alors sur l'utilité des choses concrètes : les effets personnels des morts et les monuments qui rappellent la vie des grands hommes. Ce fétichisme comtien est pourtant bien différent du fétichisme freudien. Comte se distingue d'ailleurs de Freud dans la mesure où il met en valeur le veuvage éternel.

Tout cela montre l'originalité de son argument qui reste d'actualité, bien que lui-même n'ait pas suffisamment disserté sur la politique de la mémoire.